

第27回 宗教倫理学会学術大会

大会テーマ 「不在者」の倫理 Ethics of the Absent

2026年度研究プロジェクトテーマ:「不在者」の倫理

小原克博氏が提唱した「不在者の倫理」は、過去や未来の不在者を記憶・想像することが、現在の存在者である我々に具体的な倫理的責任を喚起するという視座に基づいている。この「不在者」は、死者や未来世代のみならず、高度情報化社会において都合よく取捨選択され、意識の枠外へと追いやられた「現在を共に生きる他者」をも内包する重層的な概念である。つまり、不在者とは時の推移によって自然発生するだけでなく、我々の無関心や「世間」という同質的な枠組みによって、人為的に創出される存在でもあると言える。

特に公共圏が、異質な他者を自我の延長へと回収してしまう「世間」として機能する現状においては、同じ時代を生きる他者がその固有性を奪われ、不可視の存在へと変貌させられている。こうした「現在における不在者」の創出は、公共圏における対話の不全を露呈させるものであり、死者を都合よく「加工」する生者の奢りや、いまだ諸課題への発言権を持たない「未来における不在者」への収奪や無関心とも構造的に連動している。

直接的な対話が叶わない不在者の声を聴く営みには、つねに解釈者の恣意性というアポリアがつきまとう。しかし、だからこそ独善的な同質化を排し、不在者を「臨在する不在者」として呼び戻すための「対話的知恵」と「聴く倫理」の重要性が増している。

2026年度は昨年度に引き続き、こうした課題への関心を継続しつつ、特に「未来における不在者」と「現在を共に生きる不在者」という二つの軸について、より踏み込んだ考察を行いたい。各専門領域からこの重層的な「不在者」に対する鋭い洞察が提示され、実りある議論が展開されることを期待する。

日時:2026年10月18日(日) 10:40～17:45

受付開始 10:10 開会 10:40

会場:上智大学四谷キャンパス 9号館地下1F 9-057C教室

第27回学術大会実行委員長:佐藤啓介(上智大学)

実行委員会:〒536-0025 大阪府大阪市城東区森之宮2丁目1-132

大阪公立大学文学研究科 古荘匡義研究室内

staffs@jare.jp <http://www.jare.jp>

宗教倫理学会第27回学術大会 プログラム

10:10～ 受付開始(上智大学四谷キャンパス 9号館地下1F 9-057C教室)
10:40～ 開会
10:40～10:45 会長挨拶

研究発表〔10:45～12:15、20分発表 10分質疑応答〕

司会：末村正代(千葉経済大学)

10:45～11:15

1. 逢坂暁乃(早稲田大学大学院博士後期課程)
クィアな「交わり」のために：クィア神学とボンヘッファーの教会論

11:15～11:45

2. 平山柊一郎(上智大学大学院博士後期課程)
20世紀前半アメリカにおける強制断種に対するカトリック側の態度

11:45～12:15

3. 奥山史亮(北海道科学大学)
エリアーデの文学におけるゴシックとフォークロア

～～* 昼休み(12:15～13:30 昼食は各自お取りください) *～*～*

(評議会 12:20～ 9号館地下1F 9-055C教室)

公開シンポジウム〔13:30～16:30〕

「不在者の倫理と権利——テクノロジー時代という視点から」

登壇者

- ・趣旨説明、司会：佐藤啓介（上智大学）
- ・法律の観点から：斉藤邦史（慶應義塾大学）
- ・仏教学の観点から：亀山隆彦（京都大学）
- ・宗教学の観点から：濱田陽（帝京大学）

13:30～13:40 佐藤啓介：趣旨説明

13:40～14:10 斉藤邦史：故人の再現における権利と法

14:10～14:40 亀山隆彦：仏教における「媒介物」の思想史

14:40～15:10 濱田陽：存在した不在者をどう語るか——生成AI時代の文化・歴史解釈と死者の倫理

15:10～15:30 休憩（質問用紙にご記入願います）

15:30～16:00 登壇者同士のディスカッション

16:00～16:30 フロアとの質疑応答

～～*～*～*～*～*～*

16:30～16:40 記念写真撮影

16:45～17:45 会員総会（総会中に新評議会を開催）

※懇親会は開催する方向で検討しておりましたが、不開催とすることとなりました。申し訳ありませんがご容赦いただきますようお願い申し上げます。

研究発表要旨

1. 逢坂暁乃(早稲田大学大学院博士後期課程)

クィアな「交わり」のために：クィア神学とボンヘッファーの教会論 (For Queer “Communion”: Queer Theology and Bonhoeffer’s Ecclesiology)

【発表要旨】

本発表の目的は、ディートリッヒ・ボンヘッファーの教会論をクィア神学の観点から再考し、ボンヘッファーの教会論が示すような教会共同体や人間像、他者との交わりはクィアなものになりうることを明らかにすることである。また、現代でもなお教会共同体において同性愛をはじめクィアが迫害され枠外へと追いやられていることがしばしばある。本発表では、ボンヘッファーの教会論とクィア神学を参照することで、クィアな「聖徒の交わり」を探究する。ボンヘッファーは反ナチ抵抗運動に身を投じた神学者であり、特にナチスへの抵抗という点からそのキリスト教倫理や神学は高く評価される一方、ボンヘッファーの思想には家父長制的な要素が散見され、セクシュアリティを取り巻く理解について批判されることもある。だが、ボンヘッファーの示した常に神と他者との関係の中に置かれる人間像や、具体的な他者との交わりを徹底して重視する共同体のあり方は、クィア神学における個人的経験の重視やキリストの体としての教会再考と接続しうるものである。

2. 平山柊一郎(上智大学大学院博士後期課程)

20世紀前半アメリカにおける強制断種に対するカトリック側の態度 (The Catholic Position against the Compulsory Sterilization in the First Half of the Twentieth Century America)

【発表要旨】

本発表では、20世紀前半のアメリカ合衆国(以下、アメリカ)で展開された断種、そして、同時期のアメリカ国内のカトリックに、焦点をあてる。20世紀前半のアメリカでは、優生思想が浸透し、強制的な断種が行われていた。当時、不適合とみなされた者は生殖機能を剥奪されることとなった。そのような中で、時の教皇ピオ11世は、回勅*Casti Connubii*(『カスティ・コンヌビー』)を1930年に発布した。この回勅には、優生思想に基づく強制断種に対する非難が示されていた。また、この時期のアメリカにも、断種に対して否定的な見解を示したカトリック神学者がいた。アメリカのカトリックは、アメリカ国内における強制断種の対象にされた者たちを、どのように認識していたのだろうか。そして、断種反対というアメリカのカトリック神学者の主張には、どのような社会状況や思想が関係していたのだろうか。優生思想や断種にかかわる文献・資料も手がかりにしつつ、考察する。

3. 奥山史亮(北海道科学大学)

エリアーデの文学におけるゴシックとフォークロア (Reflections on Gothic and Folklore in Eliade's Literature)

【発表要旨】

本発表では、ミルチャ・エリアーデの文学創作に着目し、それを文学史上に位置づけながら彼の現代世界観に検討を加える。エリアーデの宗教学が、聖なるものの歴史的限定を意味するヒエロファニーを中心に展開していることはよく知られている。聖なるものは絶対的に至上なるものであり、人は歴史的に限定された歴史内存在としてのあらわれを認識することができるだけである。しかし、歴史の内できざまな苦難に直面しながら生きる人間は、聖なるものと人が一体であった理想的な原初的狀態を志向しないわけにはいかない。有限であるゆえに歴史の内できずむ人間

は、原初的な楽園を夢想し続けるのであり、そのような夢想から神話が創作されてきた。エリアーデは人間の生には神話が必要であると考え、ゴシックホラーやフォークロアを取り入れながら自身の文学を「現代世界の神話」としてつくり上げようとしたと考えられる。現代世界にとっては存在し得ない世界＝不在としての世界を描き続けたエリアーデの創作活動の宗教倫理的可能性を探りたい。

公開シンポジウム

「不在者の倫理と権利——テクノロジー時代という視点から」

各提題の要旨

故人の再現における権利と法

齊藤邦史

人工知能(AI)を用いた死者の再現については、しばしば「尊厳」や「自律」あるいは「財産」のような概念が参照され、本人による生前の意思表示や親族による同意の有無が問題とされる。しかし、他者による人格の表象そのものは、表現(言論)の自由による保護の対象となる行為であり、そもそも生前から原則として本人による自己決定の射程外にある。他方、人格的な権利利益侵害の違法性判断には、社会的な基準が組み込まれることも多く、人格の尊重は主観的な意向や感情の保護だけには還元されない。こうした観点からは、死者についても、人格をどのように取り扱うべきかという規範を観念し得る。本報告では、日本・ドイツ・米国の法制度を手がかりに、死者について何を語り、どのように表象することが制約され得るのかを考える。

仏教における「媒介物」の思想史

亀山隆彦

仏教は、長い歴史を通じて、さまざまな「媒介物」(メディア)を生み出してきた。例えば「経」(スートラ)と呼ばれる聖典と「舍利」と呼ばれる聖遺物、曼荼羅に象徴される図像や特殊な観想の技法等である。いわゆる「関係性」を核とする仏教の重要思想と文化の伝統は、これら「仏教メディア」の発達史と深く関わりながら展開した、といっても過言ではない。

そして、多様な発展を遂げた仏教メディアの中でも、もっとも大きな影響力を発揮したと考えられる媒介物が「仏像」、すなわち、仏教の開祖ブッダの姿を模して作られた形像である。紀元前後に最初の作例が出現したと考えられるが、それ以後の仏教の歴史に甚大な影響を及ぼすことになる。

仏像の意義について、もう少し詳しく述べておくと、それが媒介になることで、仏陀に関するある逆説的イメージが可能となったと考えられる。まず、仏陀は単体だが、複数の存在となる。次に、死没し「不在者」になった後も信者たちとコミュニケーションし、教化し続ける存在になる。周知のように、こういったブッダをめぐる想像力が、後に大乘仏教や密教思想が展開する際の基盤ともなる。

以上の仏教メディア、すなわち仏教における媒介物をめぐる思考の歴史が、本発表の主題である。特に仏像に注目し、その歴史的意義・機能について考察を進める。加えて、仏像を中心とする仏教メディアに関する議論を踏まえ、近年、仏教者の注意を集める「ブッダボット」(仏教対話AI)の社会的意義についても分析を試みる。

存在した不在者をどう語るか——生成AI時代の文化・歴史解釈と死者の倫理

濱田 陽

死者や過去の人びとは、現在の解釈に本人として参与し、自ら訂正や拒否をすることができない。それでも生者は、資料・事物・場所・記憶を手がかりに、その生や営みを関連づけ、意味づけながら語ってきた。生成AIはいま、この営みに加わりつつある。筆者自身も文化・歴史叙述の実践を通じ、人が資料や場所と関わり、AIとの反復も重なるなかで生まれる解釈を、どう吟味・修正し、自らの語りとして引き受けうるかを考えてきている。

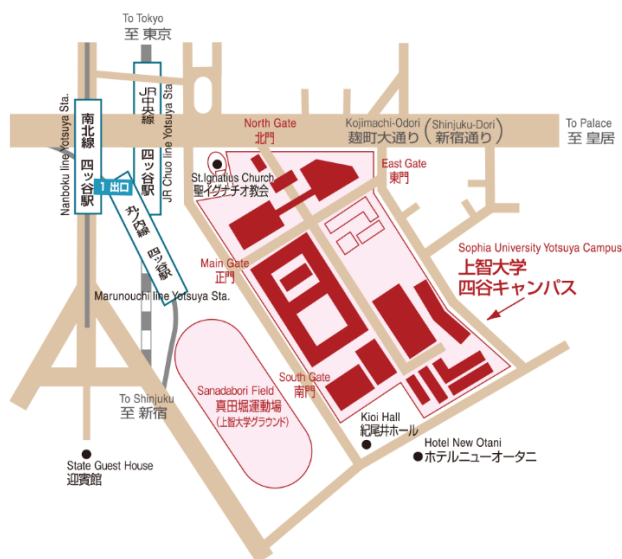
ここから、「存在した不在者」を語る倫理へ問いを広げたい。デジタル遺品や死者AIは、残された痕跡から故人の像や意味を形づくる問題を可視化する。文化・歴史叙述もまた、資料を選び、関係づけ、現在の文脈に置くことで、人びとの像や意味を形づくる。生成AIが双方に関わるとき、何を根拠にどこまで語り、何を本人に帰属させ、誰がその語りを引き受けるのか。しかも、人とAIの反復では、個々の判断や意味づけを単純に分けることができない。この困難を踏まえ、痕跡、解釈、補完・推論、本人への帰属がどう重なるかを検討する。

さらに、存在した不在者を語るAIが、どのような規範的前提のもとで開発されているかを問う。効果的利他主義・長期主義とAI安全・アラインメントの接点に着目すると、現世代から未来世代に及ぶ配慮が広く構想される一方、すでに生を生きた人びとの解釈・表象に固有の倫理は、それほど明示化されていないのではないか。これを現段階の仮説として提示する。

以上を通じ、文化・歴史叙述、死者をめぐる倫理、AI開発倫理を横断し、「存在した不在者をどう語るか」という問題圏の輪郭を示したい。

アクセスマップ

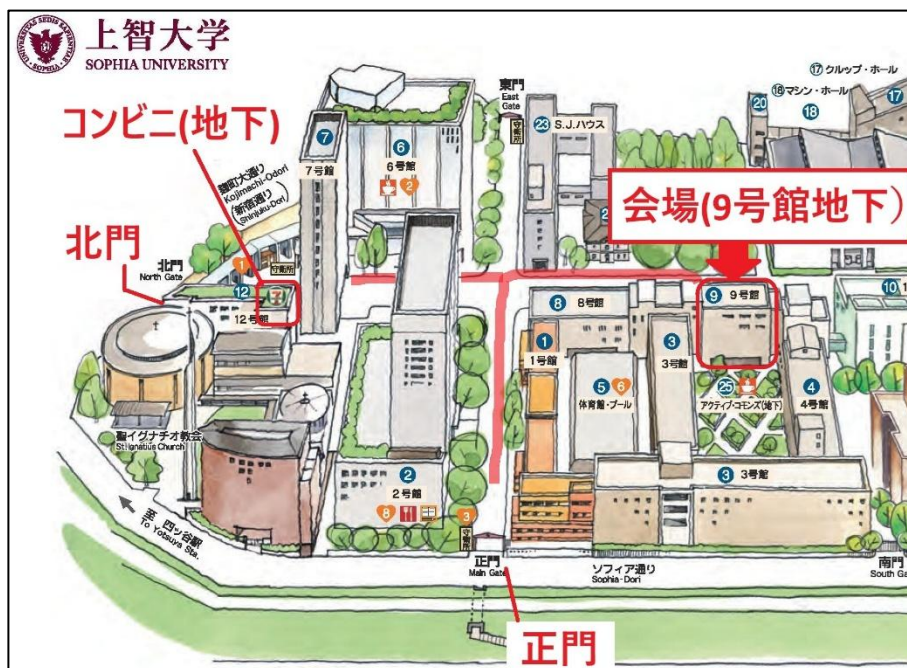
● 四谷キャンパスアクセスガイド Yotsuya Campus Access Guide



〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

交通アクセス: JR中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線 / 四ッ谷駅 麹町口・赤坂口から徒歩5分

<https://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/access/campus/>



北門が正門からお入りいただき、案内看板に沿って9号館地下においでください。学内のコンビニエンスストアは、日曜日でも営業しております。駅前に飲食店街やコンビニエンスストアがあります。会場の9号館教室では飲食が可能です。